

宇宙生命哲学

ことばはじめ

77

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者

伊藤 俊洋

NHKスペシャル 果てしなき命の探求

およそ百年前に量子力学が科学の世界に登場し、世の中は一変した。その発見者の1人であるE・シュレーディンガーは、これからは生命科学が表舞台に立つとの考えのもとに、「生命とは何か」という衝撃的な著書を著した。その著書に触発されて、J・ワトソンとF・クリックは、DNAの二重らせん構造を明らかにし、その後の生命科学の世界を飛躍的に進化させた。

1989年にタモリさんの司会・進行で始まったNHKスペシャル「驚異の小宇宙 人体」シリーズは、2025年6月、ノーベル賞受賞者の山中伸弥教授との「シリーズ人体Ⅲ 第4集 果てしなき命の探求」で、ひとまず最終回を迎えた。

最新のCG技術で、人体の機能とそのカラクリが、様々な化学物質の役割分担によって統制・制御されていることが、手に取るように理解できる。一見、生命現象は全て解明されたような錯覚さえ覚えるが、山中教授は、1つの生命現象が明らかになると、その先にはその10倍くらいの謎が現れて、研究の道が収束することはないだろうと述べられた。

最終回の終盤で、「科学が哲学に近づいてきた」とタモリさんが口走った。「霊長類の頂点に立つ人類も、生物学的に見ると、特段優れているわけではなく、地球上にどこにでもある名もない生物と大差無い存在である」との結論に達した。人類一人ひとりとって、そこに存在すること自体が、奇跡のように尊いことである。折角、一人の人類として生まれてきたのだから、その人生を、心ゆくまで全うするのが良いだろう。

山中教授は、2012年にiPS細胞の発見でノーベル生理学・医学賞を受賞され、その後、iPS細胞研究所の所長として、その実用化にも貢献された。しかし、22年には、全ての職位

を後陣に譲り、10年代に見つけておられた生命科学の根底を揺るがす可能性のある「ダークプ



第73回別府大分マラソンで3時間20分32秒と自己ベスト更新をした山中伸弥教授（毎日新聞）

ロティン」の研究に戻り、研究生活に取り組んでいる。毎日のランニングで心身を鍛え、い研究者と共に、ご自身の可能性に対して挑まれている。

「宇宙生命哲学」では、地球という惑星は、高次元巨大環境生命体であるとの考えのもとに、人の人生は素敵な地球人になる終わりのない練習である、としている。山中教授は、正真正銘の素敵な地球人の手本として、終わりのない練習に取り組んでおられるように思う。